

分散会 1

司会者 大美 和博
記録者 今永 泰生
会場責任者 灘岡 雅人

北海道教育庁生涯学習推進局生涯学習課

北海道では喫緊の課題である地方創生の取組を進めていく中で、地域のつながりの希薄化や地域の担い手不足、住民生活を支えるコミュニティ機能の低下などが懸念されている。このような課題に対して、文科省の委託を受け「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業～学びを通じた地方創生コンファレンス」の取組を行っている。各コンファレンスでは、モデル地域による先進的な事例の研究や専門的な知識の講義を受け、さらに参加者相互の熟議を通して理解を深めていった。課や部局を超えたネットワークの広がり、高校生の活動参加などを通して活動が充実していくとともに、住民が当事者意識をもつことの重要性を感じている。今後、北海道では地域づくりのために、公民館機能を最大限に活用し、首長部局、教育委員会と一体となった取組を進めていく。



五十嵐 俊介 氏

泉川中学校区学校運営協議会

泉川中学校と小学校は小中一貫の観点に立った学校運営協議会を立ち上げ、コミュニティスクールの取組を推進している。これまで取り組んできた学校支援地域本部事業をさらに拡充させ、地域総がかりで子どもの育ちを支えると共に、子どもたちも地域の一員として活躍してもらう仕組みづくりを進めている。ねらいは学校運営の質の向上、地域の子どもはみんなで育てるという意識の醸成、ふるさとを大切にする気持ちの育成とコミュニティの活性化である。

防災教育の観点から実施した「防災遠足」では小学2年生と中学2年生、それに地域住民が一緒になって取り組んだ。泉川小中学校出身の高校生や大学生が先生となり、夏休みに小中学生の学力支援を行った学習会では、循環型の学びの場となっている。



篠原 茂 氏

佐礼谷わんぱく塾

佐礼谷小学校の子どもたち16名全員がこのわんぱく塾に参加しており、6月から2月まで毎週水曜日の3時から4時まで小学校のランチルームや体育館で活動を行っている。「地域人材から学ぶ」「豊かな自然に親しむ」「地域の皆さんとの交流」「地域行事への参加」の4つをテーマとして、俳句教室、料理作り体験、座禅体験、芋掘り体験、川遊び体験、アサギマダラ観察、グラウンドゴルフ交流会、暑中見舞い・年賀状作成、されだに納涼の夕べ・ふるさとまつりへの参加といった活動を行っている。毎年これらの活動を思い出のアルバムとして記録に残している。子どもたちがふるさとのよさを見直し、上級生のリーダー性やコミュニケーション能力の育成といった成果がある反面、活動内容のマンネリ化、地域人材の確保、放課後児童クラブとの連携といった運営面での課題もある。



松浦 千枝子 氏

☆質疑応答及び感想☆

<北海道教育庁生涯学習推進局生涯学習課>

- ・ 熟議することによってアウトプットすることに価値があると思う。どのようなことにテーマついて熟議を行ったのか。
→ 「地域課題をどのように解決するのか」について話し合った。地域ごとにグループを分け「地域課題は何か」から話し合った。当事者意識をどのようにしてもってもらえるかが熟議の中心となる。当事者意識をもってもらえるためには、住民主体の熟議の場をもっと増やさなければならない。
- ・ 高校生や大学生が参加していた。子どもたちを育てることが大切と感じる。
→ 高校生も大学生もストレートに意見を言う。自分たちの意見を聞いてくれる大人が多くいることが嬉しいようである。高校生や大学生のほうが SNS など広いネットワークをもっているため、これからも高校生・大学生の意見を広く聞いていく必要がある。
→ うちの学校では防災を呼びかけている。復興の街づくりについても考えるので、とてもよい。
- ・ 大学生は公民館を利用したことあるのか。
→ おのみち寺子屋では研修を公民館で行う。公民館の祭りに出店をしたり展示物を作ったりしている。また、放課後児童クラブの活動としても活用している。
- ・ 当事者意識の視点は大人から若者・子どもたちへ広げていくことが大切である。私たちの町をどのようにしていくのかを考えさせたい。しかし、高校生と大学生を公欠で参加させるのは難しい。学校・公民館側とどのような共通理解のもとで高校生や大学生が参加しているのか。
→ 今回は私立校（特進科）2校、道立校が1校集まった。教育長から校長へ連絡をした。校長は「すばらしい取組であるので、ぜひ参加させたい」とのこと。参加したのは生徒会役員である。
- ・ 参加した高校生たちは学校に持ち帰って何か報告等を行ったのか。
→ 今のところ聞いてはいない。学校内では発表するが校外に向けては発表していないようだ。ただし高校生のネットワークの広さに可能性を感じる。
- ・ 放課後児童クラブについて、大洲市は11校開設している。いずれも学校敷地内である。放課後子ども教室は3か所であり、そのうちの1か所は公民館を活用している。
- ・ 放課後児童クラブと放課後子ども教室の一体型の開設を予定している。大学生との連携、愛媛大学施設の誘致を積極的に進めている。
- ・ 高松の公民館はコミュニティセンターに名称を変えた。各校区のコミュニティ委員会が運営しており地域の拠点となっている。11年目にして運営が順調になってきた。



<泉川中学校区学校運営協議会>

- ・ 防災遠足での学校との連携の仕方はどのようなものであったのか。
→ 学校運営協議会と学校・地域の代表者（学識者）で話し合いの場をもった。
- ・ 講師の方々を呼ばれた時の費用やコーディネーターの謝金はどこが負担しているのか。
→ 講師の費用は新居浜市の教育委員会が負担している。コーディネーターについては無償ボランティアの部分もある。個人に謝金を払うことはない。
- ・ コミュニティスクール側から学校経営・人事に対する意見は出せるのか。
→ そのようなことはまったく行わない。教員との良好な関係を築いていくために、人事関係の

ことは最初から項目に入れていない。

- 先生たちの理解を深めるために何か取組を行っているのか。
 - コミュニティスクールに関する勉強会を開いた。先生たちは仕事が増えるというが、実際は減る。例えば、部活は地域の人が外部講師として入ることができれば、その分授業に集中することができる。異業種の人が多くおり、「学校のため」と言えばみんなが集まり何でもできる。
 - コミュニティスクールとすることで学校方針が変わらない。(そうでなければ、校長が替われば学校方針が変わってしまう)。また、学校連絡会を何度も行っている。



<佐礼谷わんぱく塾>

- 放課後子ども教室としての活動ではないのか。
 - 今は市の事業として行っており、財源は市が負担している。
- 保護者の参加はどのくらいあるのか。
 - これまで保護者が参加した活動はあまりない。小規模校であるので他の多くの活動にも保護者は参加している。そのため、なかなか保護者がこの活動に参加するのは難しい。
- 大規模校での実践を紹介する。「あそこに預けておけば見てもらえる」という感覚を親がもつのではなく、家族単位で「冒険塾」といった活動を取り入れている。普段家では見ることのできない家族の姿を互いに見ることができる。
- 1年間通じての思い出のアルバム作成は、1年間の足跡を振り返ることができ、とてもよい取組であると感じた。最初からこのような活動を行っているのか。
 - コーディネーターの案によりここ5年くらいで始まった。
- 子ども教室に保護者は出てこない。保護者は姿を見せない。しかし、子どもの通う中学校が運動の全国大会に行くようになれば保護者は進んで出てくる。社会人になるとき、放課後子ども教室にいた子が相談に来たり、活動を手伝いに来たりする。
- 10年間くらい活動すれば人間関係ができる。つながりができる。きっと佐礼谷にも子どもたちが帰ってくるであろう。人間関係をつくっていなければ子どもたちは帰ってこない。
- 佐礼谷地区の子どもたち、わんぱく塾人材育成がうまくいっている。関わっている大人、学校の教員、地域住民、コーディネーターが地域のために活動している。
 - 昔参加していた子どもたちが大きくなって、佐礼谷太鼓を復活させたいとの流れもできた。
- 人材確保が課題であると思う。コーディネーターをされていて1番大変なことは。
 - 放課後児童クラブができたため活動内容を調整する必要があった。
- 放課後児童クラブと放課後子ども教室の連携がうまくいっている事例があれば紹介してほしい
 - 放課後子ども教室は毎週土曜日で有料、文科省の管轄。放課後児童クラブは平日毎日で無料、厚労省の管轄。新居浜市はどちらも教育委員会が担当している。
 - 役所でも課が違えば少しややこしくなる。放課後子ども教室は個性が出るが、放課後児童クラブは似たような活動が多いようにも感じる。
 - 放課後児童クラブでは外遊びはさせない。なぜなら、けがをすると保護者が迎えに来なければならないためである。制度的な問題、設置主の違いがあるので、一緒にすることは難しい。
 - 折り合いをつけるには、大人が張り合っていないといけない。「どのようなことが子どもたちのためになるか」という視点での話し合いの場を持つことが必要であろう。
 - 放課後子ども教室を毎日実施できるような体制ならよいが人材確保が難しい。

分散会2

司会者 平田 敦子
記録者 上田 謙
会場責任者 石原 喜久

北海道釧路市教育委員会

「まちづくり出前講座」は、釧路市職員が中心となって、市民の生涯学習活動やまちづくり活動を支援する事業である。今年度は、サークルや市民からの要請に応じて、「生活・防災編」「福祉・環境編」「教育編」など6領域、計92講座を開設している。中でも「わくわく新図書館」の講座は、行政、地域が連携し、様々な活動を展開している。市の図書館が老朽化したため、民間ビルの中に図書館を賃貸し、運営している珍しいケースでもある。最近の「子どもの読書離れ」の現状から、「学社連携」をテーマに、「学校ブックフェスティバル」を開催した。普段、図書館を利用しない児童のために、地域の学校に本を貸し出すことで、読書をより身近なものとする、よい「きっかけづくり」となった。



宮下 誠 氏

手話サークル たけの子

「手話サークルたけの子」は、新居浜市を拠点に、手話を通じて、聴覚障がいのある方々との交流を深め、コミュニケーションの大切さやみんなが支え合う社会の構築を目指すことを目的として活動している。聴覚障がいの方々とのコミュニケーションについては、手話、筆談、口話、空書き等がある。特に、手話は、「言語」であり、「映像の言語」であり、「視覚言語」でもある。活動内容については、手話学習会をはじめ、「ふれ愛フェスティバル」「愛媛県障がい者スポーツ大会」等、各イベントでの手話通訳、各種講座の講師派遣、障がいのある方々との交流などである。また、機関誌「かぐやひめ」などを通じて、情報提供や情報の共有も行っている。他にも、他団体の行事への参加、協力を行うことで、多くの方々との連携を深め、人々の「つながり」を大切に活動している。



児玉 真弓 氏

二名津まちづくり隊

「二名津まちづくり隊」は、地元有志で、二名津地区を活性化するために様々なまちおこしイベントを企画している。「音楽とアート」をテーマとして、音楽ライブ、イルミネーション、古民家活用など等を行ってきた。「にぎやかな町を取り戻したい」という思いから町中にある空き地を整備して、イベント会場を整備した。また、空き家であった「村井邸」を無償で借り受け、地元高校生による出前授業、カラオケ大会、落語、結婚式の前撮りなど、様々なアイデアを出し合いながら展開している。行政のサポートも可能だが、まずは、「自分たちのまちは、自分たちの手で活性化する」ことが重要と考え、有志で頑張っている。



増田 克仁 氏

分散会内容（質疑応答）

北海道釧路市教育委員会

Q 1 これらの事業の計画について

→教育委員会の生涯学習課が発案し、各部署に働きかけた。まちづくりをするためには、まちづくりを担う人々の育成が重要と考え、関係諸機関に協力を要請した。当初は、各部署によって温度差があったものの、今は、様々な協力をいただいている。

Q 2 「学校ブックフェスティバル」の成果について

→訪問する学校が増えるとともに、PTA研修会での講演の機会も多くなったので、地域の反応はよいと考えている。講演会では、子どもの読書の現状や読書習慣の意義や必要性を伝えている。子どもたちのアンケート結果でも、「フェスティバルの後、読書をするようになった」という意見が多くあった。

Q 3 参加者について

→時間的余裕から「学び直し」をしたいという理由で、高齢者の参加が多い。生涯学習・まちづくりへの積極的な啓発や働きかけも要因となっている。

Q 4 講座に携わるボランティア養成について

→ 継続的な運営をしていくためには、各講座の工夫やボランティアの養成が必要となってくるので、ボランティア養成の予算案を要求したり、研修機会の充実を図ったりしている。

Q 5 情報発信について

→ 年間計画、講座内容をまとめた冊子を作成して配布している。ポスターや回覧板とうも活用しているが、PR不足の面もある。また、住民のニーズにあっているかの検証も必要と考えている。

Q 6 今後の課題について

→ 「利用促進」「講座内容の統一化」「当初の目的との整合性」の3つが挙げられる。年々、利用者は増加しているものの、PR、講座内容の工夫等により、更なる利用促進を図っていく必要がある。常に、市民のニーズに合っているか検証する必要がある。

手話サークルたけの子

Q 1 組織について

→サークルの会員は基本的には健聴者ですが、学習や活動は聴覚障がい者の方と共に行っています。

Q 2 手話の習得期間について

→カリキュラム的には奉仕員養成講座（約1年）があり、修了時には日常会話ができるくらいになるとされていますが、個人差があると思う。やはり聴覚障がい者の方との交流が大切で、手話だけでなく身振りや口を大きく開けるなどして、自分の気持ちを伝えたい、聴覚障がい者の方の伝えたいことをわかりたいという気持ちを持ってほしい。

Q 3 イベント等の参加について

→えひめ国体では、オープニング、開閉会式等に参加。5年前から研修をしてきた。手話通訳の方がたくさんいたので、参加者からは「とてもよかった」という声を多くいただいた。

二名津まちづくり隊

Q1 メンバーについて

→5名ほどのメンバーが中心となって、活動している。各個人のよさを生かすため、年下のメンバーが発言しやすい雰囲気づくりや、アイデアが出た場合は、否定するのではなく「まずはやってみる」というスタンスで取り組んでいる。

Q2 行政との連携について

→まずは、「自分たちでやっていく」ことを柱として、行政と連携することのメリットとデメリットを見極めながら活動することが大切だと考えている。

Q3 今までの活動について

→活動を始めて9年になるが、途中、やめようと思ったことはない。イベントの企画、立案、実施はとても大変だが、成功した後の達成感がとても心地よい。

Q4 今後の課題

→当面の目標は、無償提供していただいた「村井邸」を核として、様々な活動を考えていきたい。結婚式の前撮り、音楽イベント、宿舎施設など、様々な可能性を考えていきたい。

最後に

地域のつながりが希薄になっている現代、地域活動に参加することの意義は大きい。公民館、NPO団体、地元有志、サークルなど、各団体がそれぞれのアプローチで、地域ネットワークの再構築をしていくことが重要となってくる。参加する側も運営する側も、人との交流の中で、生きがいを見つけることができる。社会教育は、家庭教育、学校教育等、様々な教育を「補完」しているのではと考える。

分散会 3

司会者 安部 洋士

記録者 橋本 尚子

会場責任者 宇都宮 晋

東京都杉並区

「杉プラン・すぎっ子くらぶ（学校支援・放課後活動事業）」

文部科学省から「子ども居場所プラン」が打ち出されたことを機に、創設。様々な経験をされた15歳以上の子どもの子育てを経験された方をスタッフに採用し、学校外活動や放課後の居場所活動、サマースクールなどを行っている。毎日運営することに不安を感じていた方もおられたが、遊



伴野 博美 氏

びは自発的にするものだと考え、毎日放課後に自主性を尊重した活動を行っている。子どもには家庭・学校・学校支援に区切りがないので、情報交換を学校とも家庭ともとるようにしている。

また、一年間担任制として学級に入り、朝の15分の自習の時間を有効利用して子どもたちの教育活動を行う「朝先生」という活動もしている。活動を続ける中で、学校主催、地域主催とそれぞれアイデアを出し合えるようになってきた。また大学生になった卒業生が「地域に育てられた」と来てくれることもある。「いい地域がいい学校をつくる」また「いい学校がいい地域をつくる」と言うが、学校支援は特別なことではなく、子どもたちと地域とをつなぎ、共に成長していくものであると考えている。

質疑応答

Q. 学校教育コーディネーターになったきっかけについて

A. 杉並区は66校小・中学校がある。教育委員会からPTA活動をしていたことを機に指名された。地域の人が教育に関わることができるのをありがたく感じている。また、地域には専門的な知識をもっている方もたくさんいる。そのような方にも学校に来ていただき、つながりを広めていった。

Q. つながりをもっていることが感じられて非常にうれしかった。子育てを終えた方が関わっておられるということがすばらしい。立ち上げの時、問題になったことはなかったか。

A. コーディネーターとして、まず指導要領を買って読み込むことから始めた。学校側はイベントをしてくれる場所だという認識をされている方もおられたが、あくまで教育活動をする場であることを知ってもらうため、指導案を持ってきてもらうなどして、意識の差を埋めていった。

Q. スタッフ不足等で困ったことはなかったか。工夫されていることはないか。

A. 子どもたちの心を豊かにしたい、それに関心をもってもらった人にスタッフとして集まってもらった。地域のイベントに顔を出し、信頼を得、スタッフを集めて行った。若い人をお願いしたいのは、地元の小学校の子どもが安全に通学しているかどうか、そんな小さなことからでよいので見守ってほしい。そういうことから地域の活性化、地域の安全にもつながると思う。

Q. すぎっ子くらぶに入っている子と、そうでない子の差は出るのか？

A. 卒業生の半分は私立中学校に行くので、塾に行っている子も多い。また大半の子が放課後何かしらの活動をしているような地域性がある。すぎっ子くらぶは学童ではないので、誰でも来て良い場になっているため、大差はない。

感想

「地域をなめるな」という言葉があるが、おやじが100人集まれば家が建つと言われるように、保護者の力があれば、一つの番組ができるほどの力がある。自分に何ができるかを考え、学校現場に協力してほしい。

愛媛県伊方町

「三崎おこし」

三崎高校は分校の危機を脱するため、「地域の活性化なくして高校の活性化なし」ということで、大きく三つの柱で「三崎おこし」を進めていった。



1 地元の特産品の知名度を上げる取組

地元の菓子舗の協力を得て、みっちゃん大福（ミカン大福）を試作した。パッケージやシールも自分たちで考え、松山市の企業の協力を得て商品化につなげた。地元のロコミだけではなく、新聞、マスコミの取材などで、徐々に広まり始め、本格販売が始まった。産業まつりでも伊方町代表として参加したり、えひめ食の逸品グランプリでも優秀賞を受賞したりするなど、認知度が高まった。今でも後輩たちが後を引き継ぎ、町内各イベントで販売が続けられている。

2 町外の人に「選んでもらえる」プロジェクトの実施

三崎には、漂着物が数多く流れてくる。それを生かせないかという思いで、廃校になった二名津中学校を会場として利用し、漂着物アートフェスティバルを実施した。また、ブイを使って様々な競技を行う「ブイリンピック」や、漂着物アートメインオブジェの制作にも取り組んだ。高校生が計画や実施すべてに関わり、地元の方にも温かく迎え入れられた。二名津地区には小・中もなく寂しかったが、コミュニティー再生につながった。

3 多くの人に知って訪れてもらう取組

観光資源を再発見し、価値化を図るため、ゆるキャラの line スタンプ作りをするなど、SNS を利用した情報発信をしたり、マップ作りに取り組んだりしている。地域おこしに必要なものとは、地域を愛する気持ちと地域を元気にしたいという熱い思いだと考える。ふるさとの未来をつくるのは自分たち自身である。地元と協力し合い、向き合っていきたい。

質疑応答

Q. 将来地元に戻り（ブーメラン人材）とあるが、実際に運営に関わってくれる人はいるのか。

A. 三崎おこしに関わった生徒が今大学2年なので、まだ帰ってきてはいない。愛媛大でも地域共創学部が創設され、そこに進学した生徒もいる。将来的に戻ってきてくれればという気持ちがある。しかし、後輩の活動に感銘を受けた卒業生が声を掛けてくれたり、過去の先輩方も三崎高校に力を貸してくれたりしている。数年後には三崎へ帰ってくれることを期待している。

Q. 高校生がこれだけ地元を愛せるのはなぜか。

A. 中学生のときは自分から関わることはなかったが、体験入学に行った時に活動を知り、入学する前から興味をもっていた。積極的に地域に出ていき、幅広く交流される先輩方を見て気持ちが変わった。最終的には三崎に戻ってきて地域に貢献したいという思いがある。3年生にとっては急な活動だったので大変だったが、地域を活性化させたいという思いで始めた。思った以上に反響を呼び、やってよかったと思うようになり、地域が元気になってくれたという思いがある。

Q. 主体的な活動に対して、先生はどの程度関わっているのか。

A. 文科省の指定を受け、始まった。当初はとまどいもあったし、授業を削ることにもなるので反対の雰囲気もあったが、3年間をかけて雰囲気が変わっていった。教師側が勉強しないと地元の協力を得るのは難しい。先生方にも一緒に勉強してもらっている。

愛媛県西予市

「高川地域づくり会」は、城川町高川小学校区を単位として平成23年度に設立した。せいよ地域づくり交付金を活用して、地域課題の解決や地域活性化のために、自主・自立した活動を行う組織

である。「桃源郷の里づくり」「フットパス整備」「お試し移住」など、都市部や大学生との交流による地域の再発見と住民の意識改革を目指している。その中でも「SUIJI-SLP【四国とインドネシアの6大学が農山漁村地域に滞在して、直面している課題に取り組みながら学び、実践しながら解決する活動をする】」の受け入れを平成26年度から始めた。



高川小学校児童と交流したり、地域の避難訓練や夏祭りにスタッフとして参加、交流したり、レクバレー大会や地区運動会に参加したりしている。また、都市部との交流事業として商品の販売や移住フェアに関わってもらったり、空き家改修ワークショップ・空き家改修作業にも携わってもらった。活動を通して、大学生が自主的に高川地区に来て活動してくれるようになり、高川の一員として幅広い交流ができるようになった。また、関わりを続けていくことで地域の反応も変わった。大学生とのつながりが生まれ、労働力としてしか見られていなかった地域の人も温かく迎え入れてくれるようになった。これからも大学生と高川地区を双方向的な関係で結びたい。

質疑応答

Q. (参加した大学生は) 自ら行くのか。

A. 案内を出すこともあるが、第2の故郷に遊びに行くような感じで自分から来こともある。

Q. なぜ定住を考えるようになったか。

A. 気付いたら「将来そこに住むだろう」と知らない間にそう思っていた。大洲出身ということもあり、大洲のために働くという気持ちがあったが、自主的に遊びに行く間に気持ちが変わった。

Q. 若い女性が入っていくだけでも、地域が元気になる。地域で取り組みたいことはあるか。

A. 自分が何かをしたいという思いはないが、いろいろな活動に参加し、高川の取組の一員になりたいという気持ちがある。

Q. 受け入れが可能な状況はどれほど整っているか。

A. 空き家がどれほど活用できるかが大事である。地域の人も初めに比べて理解が深まり、6～7件は貸し出し可能な物件がある。しかし、リフォームが必要であるのが実情である。

感想

○ 徳島県上山町ではIT系の企業を呼び、田舎に住みながら仕事をされている取組もある。これからそういった取組が増えてくるのではと期待している。

○ 都会であっても空き家が多いのが現実である。高齢者のシェアハウスにしたり、大学生が入ったりと様々な対策を打っている。都会は「住む」ということに関しては課題がある。便利なところが住みやすいかは疑問である。高校生たちが活動している間に行政が協力していかなければならない。行政や企業に入っただけで活動を利用し、大きな取組にしないといけないと思う。

○ 地域を何とかしよう、学校と地域が協力して地域・学校を作り上げようという気持ちを感じた。また、三崎高校・高川など地域を盛り上げようという若い力も感じた。様々な地域でやっていることを、行政がどれだけバックアップできるかが大事である。互いに歩み寄らないと長続きはせず、高まってはいけないと思う。活動が繋がる手立てを考えていきたい。

○ NPOの活動を通じて、若者は創造性に欠けてきたという危機感をもっていった。しかし、救いは、その中にも経験豊かな子がいることであり、体験活動の必要性を感じる。人間らしさに触れるのは地域しかないと考えており、地元に戻ってほしいという思いはあるが、雇用を作らないと若者は定住しない。これは大人が変えていかなければならない。未来を築く若者の助けができれば、そしてこれからの日本を変えていきたいと思っている。

分散会 4

司会者 今井 博志
記録者 菅原 恵
会場責任者 森脇 和夫

神奈川県立市ケ尾高等学校

市ケ尾ユースプロジェクト

市ケ尾ユースプロジェクトとは、横浜市青葉区役所とNPO法人「まちと学校のみらい」のサポートのもと、柔軟な発想力と行動力をもつ市ケ尾中学校と市ケ尾高校の生徒と豊かな体験をもつ大人が力を合わせ、地域の課題解決と魅力づくりに取り組み、地域力の向上を目指した組織である。

現在、様々な課題解決に向けて5つのグループに分かれて活動している。地元野菜である「わさび菜」を使ったサンドイッチの開発と販売、地域イベントとしてのスタンプラリー、青葉区のキャラクター「なしかちゃん」を使ったグッズの作成などである。

地域の課題を解決するためには、行政だけが動くのではダメ。大人が活動するだけでもダメ。中高生が考えるだけでもダメ。つまり、地域みんなで実際に行動に起こし、実践し、地域住民を巻き込んで実現を目指していかないといけない。地域を変えるためには全員が動かなければいけない。一人一人が舵を取り、船を動かすことが大切である。



出田遼聖氏・佐々木亜怜氏

鐘踊り保存会

鐘踊りの保存と継承

鐘踊りとは、四国中央市で行われている伝統芸能で、戦乱の世に当地を治めていた「大西備中守元武（おおにしびちゅうのかみもとたけ）を偲ぶ鎮魂の踊りである。奉納は毎年8月最終日曜日に行われている。

踊りの構成は大人14名小人8名計22名である。かつては氏子とその子どもで踊っていたが、過疎化・高齢化が進み、継承できる人間が少なくなった。現在は子どもの踊り手の半数が他地区からの応援であり、このようにしながらでないと運営できない状態である。保存会としては子どもたちに、愛媛県無形民族文化財というすごいことをしているのだと教えている。300年の歴史のある踊りの後継者であって、長い歴史の1ページを刻んでいるということである。子どもたちはこのことを理解はしていないと思うが何かしら感じている。

運営が厳しい面はあるが、子どもたちから「鐘踊りをやりたい」「参加して良かった」という声もありうれしい。豊かな自然との触れ合いや厳しい練習を通して、豊かな心を育み、やがて大人になった時には次世代の継承者となることも願っている。



山崎 正志 氏

第15回「民家の甲子園」愛媛県大会実行委員会

第15回「民家の甲子園」愛媛県大会

「民家の甲子園」とは、高校生が残したいふるさとの町並みや景色、建物、伝統文化を受け継いでいる人々の姿を、漢字一文字のテーマを軸に、5枚の写真、PR文、7分間のプレゼンテーションで発表し合う大会である。愛媛県大会は今年で6回目で、全国大会は15回目を迎えた。今年のテーマは「流」で、本県からは今治北高校と川之石高校が出場し、上位の成績だった。

審査員は、作品から感じる高校生の観察眼と感受性、そして何より、ふるさとへの温かい思いに感動する。高校生は校外へ出て撮影や取材をするため、地域の方々との交流も生まれ、ふるさとの魅力や課題を再発見する。地域や大人も高校生からパワーをもらい、どちらも得るものがある。

実行委員会としては、文化部の活動実績が残ったり、ふるさとへの愛着心が育ったりと魅力があ



處 淳子 氏

るこの大会を、より高校生にとって役立つ大会にして継続させていきたいと思っている。

質疑応答

《市ヶ尾ユースプロジェクト》

Q サンドイッチの開発の期間はどれくらいか。

A 1～2ヶ月。

Q 指導者はいたか。

A 大人が中高生の意見を尊重してくれ、中高生がメインで行った。

Q 何肉を使ったのか。

A わさび菜の辛みを生かすためと安さから豚肉を使った。

Q 普段は家で調理をしているか。

A 普段はしていないが、今回の学びを通して挑戦してみようと思う。

Q サンドイッチはいくらで売ったのか。

A 1つ200円で売った。区民祭りで250個売れた。

Q 地域のどのような人たちがプロジェクトに関わったのか。

A 地域の不動産会社社長や食品メーカーの方、地元の方、卒論のための現役大学生が関わった。

Q プロジェクトに参加する前と後で生活の中で変わったことは何か。

A (高校生) 自分達が考えたことを、大人が受けて動いてくれることを知れてうれしかった。
(保護者) 子供達は自分で考えることが増えた。

○ 地域で活動する時に、高校生をどうやって前に出していこうかと苦勞する時がある。反対に高校側から地域に働きかけるこのような学校があることがありがたい。

Q 地域の方と円卓で話す時間はいつ行っているのか。

A 授業後の放課後や夏休みなどに行っている。

Q プロジェクトに参加したきっかけは何か

A 市ヶ尾高校がコミュニティースクールになったことから、生徒会活動でプロジェクトが開始した。自分自身は大人から色々なことを学びたいと思って参加した。

Q 生徒が率先して行うことについて学校側はどう思うか。

A 今年度始まったばかりで、どのように動いていくのか予測がつかなかった。教員が中に入り一緒に活動しているわけではない。来年度も継続していくが、生徒会だけでなく、したい人が集まって有志で行っていくような活動になって欲しい。また、本校の魅力の一つになって欲しい。

Q 二人はその他、どんな活動をしているのか。

A 文化祭実行委員や体育祭実行委員をしている。初めから最後まで生徒が全て行い、教員は最後の確認のみ行う流れである。

Q 生徒中心の活動の時の教員の心構えはどのようなものか。

A 生徒に自由にさせる分、教員の事前準備をしっかりとしておく。

Q 青葉区には高校は何校あるのか。

A 県立高校が3校、すぐそばに私立高校が1校ある。

Q プロジェクトでお世話になった人に何かしらのお返しをする計画はあるのか。

A プロジェクトの目的が地域の活性化なので、日本全国に市ヶ尾の名前を知らせたいと思う。また、魅力を広めきれなかった反省を生かしたプロジェクトも考えている。



《鐘踊りの保存と継承》

Q 子どものやる気スイッチの入れ方

A 練習の前に十分に遊ばせ、練習中はメリハリをつける。

Q 大人は地元の人なのか。

A 半分強が地元の人である。

- Q 観客はどのくらいいるのか。
 A 今年は150名くらいであったが、年々減っている。
 Q 幼い子の興味関心を引きつける工夫
 A 棒の回し方を教えたり、太鼓を叩いてみさせたりしている。
 Q 踊り子に年齢制限はあるのか。
 A 女子は小学校6年生までで、男子はそれ以降も段階を上がる感じで続けていく子もいる。
 Q 市の補助はあるのか。
 A 氏子の負担金のみで行っている。
 Q 300年も続いている伝統を残していくために意識していることはあるか。
 A “細く長く”を意識している。同じような伝統芸能を、存続させることができなくなった地域もあるので、できる限りは続けていきたい。
 Q 継続していく難しさはないか。
 A 離れていく子もいるが、ハマる子はハマる。また、本人ができない状況になっても、指導する立場で関わる子もいる。

《第15回「民家の甲子園」愛媛県大会》

- 「民家の甲子園」を初めて知った。
 ○ 昨年度と今年度、「民家の甲子園」に審査員として携わった。高校生の強い思いを感じて涙が出た。
 Q 出場する高校生はどんな集まりなのか。
 A 写真部や生徒会などの集まりである。校内で写真を撮るより、校外へ行き、地元の人と関わりながら写真を撮ることをさせてくれた教員の関わりがありがたかった。
 Q 神奈川県代表はあるか。
 A 関東はいない。
 Q 大会テーマの漢字の決定方法
 A 大会の2ヶ月前から各県の実行委員会が出し合い、その中で多いものから話合いで決める。
 Q もっとこの活動が知れ渡ったら、参加する学校が増えるのではないか。
 A 案内の文書は多くの高校に配っているが、管理職のふり、担当教員のふりで知らない人もいと思う。校長先生やPTA会長が集まっている場での紹介を積極的にしていきたい。
 Q 参加してみたいが、3人以上でないと参加できないのか。
 A 規定は3人以上だが、何とかしたい。
 ○ 「民家の甲子園」のことを、文書での紹介ではわかりにくい。メディアでプレゼンが流れたら、興味をもつ人が増えるだろう。30秒紙でネットにのせるなどの方法もある。

参加者の活動紹介等

- 新居浜南高等学校ユネスコ部の活動紹介
 地元である新居浜市が誇る別子銅山について学び、ワークショップや現地でのガイドなどを通して情報発信を行っている。
 ○ NPO おのみち寺子屋の活動紹介
 夏休みに小学生100人を集めて、4泊5日で100kmを歩く活動をメインに行っている。参加した子供達が小学校卒業後もお手伝いで参加し、つながりができている。
 ○ 人が集まる拠点作り“Machi Deco”の紹介
 ○ 防災小説コンテストの紹介
 町作りをデザインする時に防災教育がキーワードになると思う。御荘中学校では、全校生徒が1000文字の防災小説を書き、コンテストを行った。
 ○ 第2回地域教育実践交流集会（東・中・南予別の交流集会）の紹介

分散会5

司会者 安藤 紀代・山本 直美

記録者 高田 容弘

会場責任者 安倍 周作

横浜市立東山田中学校区地域学校協働本部(やまたろう本部)

東山田中学校区地域学校協働活動

地域学校協働本部は、地域住民の学校支援ボランティアなどの参加をコーディネートする活動を行っている。小学校では授業の見守りやまちの先生紹介(年間30~40件)、中学校では赤ちゃんふれあい体験のサポートなどを行っている。また土曜日や放課後に学習支援も行っている。特に力を入れているのは小中一貫のキャリア教育支援で、地域にある準工業地域の企業を見学する小学校3年生の「まち探検」、5年生の「工場見学」、中学校の「プロに学ぶ会」(1年)「職場体験」(2年)「模擬面接」(3年)のコーディネートである。「まちのたからを学びに生かす9年間」(学べる人、もの、場所を一覧にしたパンフレット)を作成し、社会に開かれた教育課程につなぐなど、「子どもたちのために」という視点や原点、学校のニーズを一番大切にして学校ではなかなかできないことを提供できるようにしている。



蟹江 千里 さん

NPO 森からつづく道

地域の課題を解決

平成23年に第1回四国生物多様性会議が開催された際、お手伝いしていた愛媛県内の自然が大好きな人たちが集まり、この会が立ち上がった。活動は、①生物多様性の理解、②子どもたちの課題解決、③市民協働のまちづくりを中心に行っている。実際の活動では、しっかりとした環境調査を行い、調査結果に基づき子どもたちや市民を対象に自然観察会などの環境教育を行っている。今治城の堀では貴重な生物も発見された。これらをもとに市民・企業と共に保全活動を行っている。活動を続けていく中で、子どもたちに関わる課題がたくさんあることに気付いた。子どもたちに生きる力・学ぶ力をつけてもらうために、子どもとその保護者を対象にした自然体験活動(例:森育・今治自然科学教室)、地域体験活動や自然観察指導員講習などを愛媛県内全域で行っていきたいと考えている。



小澤 潤 さん

愛媛県立新居浜南高等学校 ユネスコ部

あかがねプロジェクト~ふるさと新居浜を未来へつなぐ~

新居浜の課題である人口減少を食い止め、持続発展可能なまちにするための鍵は歴史・別子銅山にあると考えた。そこで、ユネスコ部では別子銅山に関する場所のフィールドワーク、学習会の開催や参加、ESDパスポートの配付、「あかがねの道スタディツアー」の企画、各所でのパネル展示、ガイド、足尾銅山への訪問など色々なことに挑戦してきた。これらの活動を通して、地域への愛着や誇りである「シビックプライド」を高め、未来の地域人としての育成を図っている。今後も、先人たちの偉業や体験者の記憶、残された近代産業遺産の意義や歴史を後世に継承し、循環させる「学びの絆サイクルの輪」を広げ、地域の活性化に生かしていくために、地域・企業・行政・学校などと連携・協働した様々な取組を行っていく。



河野 義知さん 田中 陸矢さん 堤 優弥さん
松浦 理久さん 加藤 文音さん 古川 若奈さん

質疑応答

東山田中学校区地域学校協働活動（やまたろう本部）

Q1 3年生、5年生については分かったが6年生は？

→地域と企業をつなぐ活動。各クラスでテーマを決めて取り組んだ。企業のキャッチコピー作りや商品開発作りなどを行ったクラスもある。企業も自ら参画しようという雰囲気がある。

Q2 中学校のキャリア教育は、なぜ若いプロの頼むのか？

→なるべく若い方の方が親近感がわき、中学生に伝わりやすい。話を聞いた中学生はグループで寸劇などにして発表し合う。また、まとめかたなどは教員と事前に打ち合わせや研修を行っている。教員にもまとめのプロを紹介している。

Q3 学校と企業がどうやって時間を作り、話し合いをしているのか？

→教員からやりたいことについて話を聞き、それをもとに80の企業から選び、つなぐようにしている。時間はかなりかかる。コーディネーターは複数おり担当を分けている。

Q4 人材はどのように探しているのか？

→ケアプラザなどの団体と一緒に動く。そこに出入りしている方とつながることもある。なかなか簡単なことではない。

Q5 キャリア教育に関わる大人の交流会、卒業式への招待があるか、スムーズにうまくいくのか？

→学校側は歓迎している。コミュニティスクールとして開校しているので地域の方が入るのは当たり前になっている。子どもの顔を見ると、もっとできることはないかと思い、やりがいを感じられる。子どもたちの顔を見ていただいて動いていただいている。

Q6 学校と地域のやりとりのなかで難しさは？

→地域の方にも学びがないと続かないので、できるだけそういったものになるようにしている。また、学校のやりたいことができるように気を付けている。子どもが学び大人が学べるようにしている。企業も子どもの反応から自分の仕事を見て驚いてくれることに喜びを感じている。

Q7 費用、サポートは？

→工場側でいうと社団法人から。企業としても地域に受け入れられたい企業を目指すという考えで協力がある。本部の冊子については助成をいただいている。

Q8 この先の活動は？

→大人になる子が出てきた。なるべく地元の人から学べるようにしていきたい。ボランティアについても学生にお願いしている。

地域の課題を解決（NPO 森からつづく道）

Q1 イノシシとは共存できる？

→共存できないがしていかなければならない。そのためには食べる。今、県内に食肉加工場を作っている。みかんの被害分は回収できるだろう。県で対策を取ってもらうことが大切。

Q2 オオキンケイギクについて教えて欲しい。

→特定外来植物であり、たくさん生えている。このパンフレットは大三島の方が、自分たちが何とかしなければならぬと作成した。何もしなかつたら大変なことになる。

Q3 私たちにできることは？

→生活環境を守ることから始める。天ぷら油を適切に処理するなどできることから始める。一番は生き物に関して関心をもつこと。海岸清掃などに取り組むのはよいことだが、貴重な植物がいる場合もあるので気を付けて欲しい。

Q4 オキザリスが広がってしまった。どうすれば？

→駆除はなかなか難しい。一番聞くのは除草剤。こまめに抜いていくしかない。一番は外国から来たものを植えないようにすること。もっていかないこと。

Q5NPO 森からつづく道も賛同者が増えて大きくなっている？

→ほとんど賛同者はいない。大学生とか学者が多い。僕たちがやるのは協働です。特に行政へもって行って動かす。協働が一番。しかし、今、企業の賛同が難しい。企業にメリットになることをしないといけない。それだけのNPOの力をつけないといけない。ただ、愛媛県の場合にはいい補助金がたくさんあるのでそれを利用するとよい。

Q6 環境学習リーダーの育成について？

→環境について正しく理解できる人を増やし、それを伝え指導できる立場の人を育てたい。

○ その他意見交流

- ・取り組みがすごい。見えないところで一生懸命されている。

→それでいい。私たちが目立つ必要はない。私たちはやったという気持ちがあればよい。

あかがねプロジェクト～ふるさと新居浜を未来へつなぐ～

(愛媛県立新居浜南高等学校 ユネスコ部)

Q1 卒業後は？

→地元就職し、ずっと新居浜にいつづけたい。県外で働きたい。でも、将来は新居浜に戻りたいと思っている。地元に進学し、新居浜に貢献したい。

Q2 ユネスコ部に入ろうと思ったきっかけは？

→別子銅山について知りたいと思った。新居浜のよさを全然知らなかったので、新居浜について知りたい、好きになりたいと思った。何か新しいことを始めたいと思った。

Q3 国内外のつながりについて？

→足尾銅山だけでなく、秋田県の鉱山や島根県の銀山にも行っている。マチュピチュつながりでペルーの大使を案内したことがあるのでぜひ行ってみたい。

Q4 自分の子どもたちに学んだことをどう伝えたい？

→小さい頃から現地を案内したい。実際に体験させたい。

Q5 3年間部活を通しての変化？

→続けていくことでコミュニケーション能力がついた。新居浜に魅力を感じていなかったがいつもと違う日常を感じるようになった。想定外に対する対応力がついた。視野が広がった。シビックプライドが高まった。

○ その他意見交流

- ・みなさんとの出会いに感謝
- ・ぜひ別子の自然も説明して行って欲しい。

